芦花と現代文学

平林一

一

「芦花と現代文学」という題目で報告することになったわけでありますが、このテーマに十分に答えることは非常に困難であります。荒正人は雑誌『文学』芦花特集号（一九五六年八月号）で「芦花は過ぎてゆく。すでに多くのひとによってその後姿さえも見失われかけている。だが、芦花の仕事のすべてが私たちの心を十分に通過してしまったとはいえぬ。或いは、芦花こそは、私たちの未来から呼びかけてくる、まだ余りはっきり聞きとれぬ声の一つかもしれぬ」と言っておりますが、そのような徳富芦花像を私が統一的、全容的に把握し、現代文学との創造的連関において正当に評価するには、現在の私の力をもってしては不可能であるからであります。それ故、今日の報告におきましては、戦後における芦花再評価についての問題点の紹介、及び芦花の文学理念といったようなものにふれ、その責を果したいと思います。

二

東洋経済新報社で刊行した『綜合』という雑誌の本年（昭和三十二年）七月号に、江藤淳・遠藤周作・佐伯新一・進藤純孝・針生一郎・村松剛らの若き文芸理論家が結集し、「新しい文学史への提唱」として「現代文学の衰頽を破るために」という報告が載りました。それは「想像力、ジャンルと構造論、芸術交流体の問題に焦点をしぼって日本の近代文学史に新しい照明を与える」作業の序論でありましたけれども、非常に意欲的なものがうかがえたわけであります。そこでその理論家たちは、「ほとんど無条件に熱烈に信じこまれていた文学的観念、〝近代〟や〝自我〟や〝現実〟や〝リアリズム〟などが、改めて検証され始めており、明治以来のわが近代文学全体がいまやひとつのサイクルを廻り終えようとしているようにさえみえる」今日、「われわれの文学にとって、新しい〝本質論〟の季節が到来しかけている。つまり本質論をヌキにしては何事もなしえない事態の

到来である」と述べております。たしかに、明治以来なりたってきたわが国の近代文学が、いまや、新しい基礎の上に再建されなくてはならなくなっていること、したがって私たちは常にそれぞれのあり方の枠をこえ、「文学とは何か」という本質論に媒介されながら、文学創造の論理を発見しなければならなくなっております。私たちは戦後十年の文学運動の中で、「民族と文学」というような根本的な問題に対決せしめられ、否応なしに古代以来のすぐれた日本文学の作家と作品を、現代文学との創造的連関において正当に評価するよう、要請されたわけであります。そうした時、特に明治以来の日本近代文学の再検討が苛借なく要求されるのは当然でありましょう。そして、徳富芦花もまた、日本近代文学再検討の中で非常に重要な作家となってきたのであります。

それでは、戦後十年の泡立ちの中で先ず芦花はどのように評価されたでありましょうか。私はその問題からふれてゆきたいと思います。

戦後の再評価の場合、一九四八年頃までの「自由の幻想時代」のものと、それ以後戦後の民主化政策の反動期に入り、アメリカ帝国主義がはっきりとその姿を日本国民の前に現わし、「民族の独立」が呼ばれはじめた時期のものと、二つを例にあげて考えてみたいと思います。前者は荒正人の「負け犬」という評論であり、後者は「国民文学論争」時における猪野謙二、丸山静、桑原武夫らの意見であります。

「負け犬」は一九四六年(昭和二十一)の暮、『近代文学』七号の誌上に発表されました。近代文学派の人たちは、かって、マルクス主義文学運動の敗退を目撃し、転向とそれにつづく戦争の重圧下において、その外部の圧力に堪えながら孤独な自己を見つめてきたわけであります。そうした戦争体験を通じて、自己の主体に即した新しい「近代」の探求を企て、文学的真実を見出そうとしたのが彼らであったわけであります。その近代文学派の一人である荒正人は、敗戦直後、「第二の青春」(一九四六年『近代文学』所収)という評論で自己の戦争体験と再生への決意を語ったのでありますが、その「第二の青春」の中で彼は次のようなことを言っております。

もし、しんの希望が敗戦日本という沙漠のなかから、不死鳥のごとく羽搏き生れるとするならば、その死灰となるものは、第一の青春に夢みたヒューマニズムを悉皆否定し、焼き尽したものにほかならない。似而非ヒューマニストの、スコラ的弁証法などというごまかしの形式を通らず、もっと直線的に電気のように肉体に伝わってくるものとしての、否定を通じての肯定、虚無の極北に立つ万有、エゴイズムを拡充した高次のヒューマニズム――これこそわたくしたちが、第一の青春という浪費のなかから購うことのできた唯一の財貨ではないのか。

ここには高次のヒューマニズム(人間性)をかかげ、新しい「近代的自我」を求める声にみちみちており、そこに一種の新鮮さがあったわけであります。そうした自己の世代の、自己の宿命を特権化しながら、その文学批評のモチーフを近代作家の中で生かそうとした時、一生涯兄と家に対する劣等感に苦しんだ芦花が浮かび上ってきたわけであります。

この新鮮な芦花論の中で荒正人は、異常なまでに強い芦花の劣等感にふれながら、父と子、姑と嫁、主婦と家婢、上役と下僚、古参と新参、先輩と後輩、将校と兵卒などすべての日本的秩序の中で無

数に現われるいざこざの根本原因は、儒教的権力主義が支えている「家」の秩序であり、そのうえに天皇制があったとし、こうしたところでは自由な近代的個人は息づくことが出来なく、芦花はそうしたものに屈服とか妥協とかするわけにゆかず、それとの対決をえらび、そこに複雑な芦花の生涯があったことを指摘しております。兄蘇峰はたしかに徳富家にとって栄光の人であり、弱虫、泣虫、怒虫、偏屈虫の芦花に対して勝利虫であったわけであります。民友社における雑文生活時代、芦花は草野門平から、「兄は利巧だが、弟は何処を風吹くかと云ふ顔をしとる。」と嘲笑され、社員からは「猫」と陰口をきかれ、母からは「馬鹿」と罵倒されております。まさに芦花は徳富家及び民友社にとって余計者的存在であったわけであります。しかし、芦花はこの絶望的状態の中から自己確立をしようといたしました。芦花は二十九才の誕生日（明治二十九年十月二十五日）に次のように記しております。

嗚呼吾は久しき奴隷にてありしよ。
家兄の奴隷なりき。
情欲の奴隷なりき。
あらゆるものの吾は奴隷なりき。
今より後、吾また決して奴隷たらじ。
何人にもあれ、何ものにまれ、わが自由を
礙くるものあらば、即我敵也。

（新潮社版全集第十六巻　四六五頁）

この奴隷的状態からの自己確立、自己解放のドキュメントとして「不如帰」、「自然と人生」、「思出の記」、「黒潮」などの作品があったわけでありますけれども、その間における精神状況を見事に荒はえぐり出しております。そしてそれは戦前の古き日本に対する荒の訣別のことばでもあったわけであり、古き明治社会であえぐ近代自由人の運命追求は、敗戦直後の解放感にみちた人々の心に大きな感動を与えたのであります。

戦後文学の出発点にあたって展開された荒正人の芦花論はたしかに荒廃した日本人の心に、再建の方途についてのある示唆を与えたのでありますが、一九五〇年、朝鮮戦争が勃発して戦後のバラ色の幻想が決定的に破れ去り、改めて「平和と独立」という命題が日本民族に課せられ、「国民文学」への要望がおこってきた時、芦花はまた猪野謙二、丸山静、桑原武夫らによってとりあげられたわけであります。「国民文学」への要望は、朝鮮戦争からサンフランシスコ条約に進む過程の中で露呈されてきた日本民族の危機についての鋭い自覚が、文学と国民との関係についての立ち入った再検討の必要に文壇内外の人々をつきやり、大衆小説と文壇小説とに二分されて、危機的な国民生活の要求を十分にくみあげることができず、またそれにふさわしい文学方法を確立していない日本近代文学の伝統と現状に対する、切実な批判と反省に基いていたのであります。こうした動向の中で岩波講座『文学』が一九五三年十一月から刊行され始めました。その講座の中で猪野謙二は「日本の近代化と文学」を論じ、日本近代文学が、「国民文学としての大衆性」と「国民共通の問題意識」の二つの要素を統一的に包含してゆくことが出来ず、それぞれが別個の路線をたどって発展してゆくようになったために、「内田魯庵とか田岡嶺雲とか徳富芦花とかいう特異な才能が、文壇の内部でかれらにふさわしいその位置を見出すことができず、結局は多少ともその中心からはずれたところにおいて、その注

目すべき仕事を残すようになってきたことなどは、一つの問題として考えなおされねばならぬ」と述べております。更にこの問題をもっとラジカルに押し進めたのが丸山静であります。丸山は日本近代文学が、わが国の「上からの近代化」という特殊な事情に媒介されて、文学を自己の直接的なモチイフの表現とするような「近代的発想」を主流として成立したが、人生の現実に対してあまりにも忠実であり、あまりにも人生を「全体的」に把握していた、二葉亭や透谷、独歩や芦花、藤村や漱石、そして啄木というような文学者は、日本の国民が見えざる社会的必然力につらぬかれて、その人間的欲求をひっきりなしになしくずしにされてゆくのを、いわばわが国の社会の「全体的状況」として洞察しないわけにはゆかなかったとし、そしてそうした人たちの中に、近代日本の歴史状況の中で人間の可能性を追及したリアリズムの系譜が流れていたことを強調したのであります。（プロレタリア文学の問題点、「現代文学研究」所収）

桑原武夫もまた芦花再評価に発言をした人であります。桑原は「不如帰」について論じ（お茶の水書房刊「国民の文学」）、国民文学の要請が単なるカケゴエでないならば、第一に着目さるべきはこの作品であるとし、「不如帰」には当時の日本国民にとって最もイノタレストの強い、つまりベーシックな問題が取扱われていたと述べています。そのベーシックなものというのは、

一、古い形の家族主義
二、しだいに暴威をふるいつつある結核
三、キリスト教
四、国家の軍国的膨脹政策
五、国民性改良

などであります。そして桑原は、「What it is よりも What ought to be を書くのが小説家の任務である」と言った芦花の言葉にふれ、以後次第にこの精神が忘れられすぎ、「不如帰」などの黙殺が「文学的」と見られる空気の中で、日本近代小説が生産されてきたことは日本の不幸であったと述べております。桑原にとっては、徳田秋声に血みちをあげるより徳富芦花のきまじめな作家態度を問題にする方が、より重要だと思われたわけであります。そして又、桑原が「不如帰」に固執したのは、「芸術的評価やイデオロギーにあまりこだわらず、ともかく国民大衆にアッピールしえた文学作品をすべて分析し、そこに共通要素を求めてみる、といった行き方」が「国民文学の創造」に必要であると考えたからであります。そしてこの思考態度は現在の桑原に一貫して続いております。今月（昭和三十二年十一月）出版された岩波書店『現代思想』十一巻で桑原は「伝統と近代化」という一文を書いておりますが、その一箇所を少し長い引用になりますけれども紹介いたしたいと思います。それは次のようなものであります。

私は（中里）介山や吉川英治を国民文学のモデルだとはいわない。しかし、国民文学が前衛文学ではなく、国民大衆にうったえるべきものであるとしたら、そのイデオロギーに不満であろうとも、あのように多数の国民をとらえた作品は、まず第一に考察されねばならぬはずである。徳田秋声や樋口一葉まで国民文学というのなら、当然これらの作家も国民文学といってよい。そして、それがツマラヌものであるとしたら、私たちの社会はそのようなものをしか国民文学の伝統としてもちえないような社会であっ

た、ということを認めて、それを改めるように出発する、という考え方も出てよかったのである。ともかくそういう試みがなされたとしたら、国民大衆をつかむとはどういうことであり、こういう作家たちがいかに日本人のベーシック・パーソナリティを把握しているかがわかって、左翼文学者のみでなく一般文壇文学者も自己反省にさそわれるだけの効果は少なくともあったろうが、量を考えることは卑俗だという考えが、最初からこの問題の展開をさまたげていたと思われる。

したがって諸家の要望するような国民文学があらわれたとして、それをマス・コミがどのように扱うであろうか、などという問題は全く考慮されず、また、一般国民へのうったえかけでは文学より映画の方がはるかに有力であることへの反省などは少しもあらわれなかった。一口にいって、国民文学論議は、現実主義的でなさすぎて、提唱者の意図に反して道徳的政治的な合唱におわらざるをえなかったのは遺憾であった。そしてこの国民文学の要請に答えるごとく、民族の危機的感覚を拒否ないし無視したところのベストセラーが続出することになったのである。

こうした桑原の方向と同じものをもちつつ、少しニュアンスの違ったところから「大衆と文学」を一九五一年以降問題にされてきたのが本学の安永武人氏であります。安永氏は一九五三年日本文学協会関西大会で――「蟹工船」「党生活者」はどう読まれているか――という副題のもとに「読者の問題」を報告されたが、そのよって立つ地点は次のような言葉によって代表されると思います。

民衆のこんにちある実態と無媒介に文学が成立したならば、たとえそれが客観的には民衆のになう矛盾をとらえていても、その人々の魂にくいいることはできないであろう。ここにあえて読者の問題を、こんにち提出する理由の一つがある。このことは、また伝統と創造とがややもすれば直線的に結びつられけようとする傾向に対しても、問題をより具体的に展開させることに役立ちはしないかと考えるのである。

というのであります。以後安永氏は吉川英治の「宮本武蔵」の分析や農村調査をつゞけておられますので、そこから日本の民衆のもっているベーシックな問題についてのすぐれた成果を期待するわけであります。

話が少し横道へそれましたが、ともあれ、戦後のはじめ、荒正人によってスタートについた芦花再検討は、その文学・思想を通じて、どれだけ全国民的な様相を呈していたかという大きな問題にまで発展したのであります。

三

それでは次に芦花の文学理念、作家意識というようなものにふれてゆきたいと思います。

「不如帰」（明治三十二年）、「自然と人生」（明治三十三年）の二作の成功に自信を得た芦花は菊池慎太郎という主人公を設定し、「自我のあるものを語るべく」「思出の記」（明治三十四年）を書きました。「思出の記」には、個人と国家の間に調和が保たれていた資本主義社会形成期における、一青年の成長過程が描かれております。然し、慎太郎が東京帝国大学で英文学を勉強するようになった時、その最高学府なるものは、能吏の卵、世渡り上手の卵などを孵すに適当な場所であり、学問を立身出世の近道と心得ているような場

所として慎太郎の眼にうつり、そこから慎太郎は立身出世主義を捨て、自我の内的充実を最後の目的とするようになります。これについて荒正人は、

この孤独感は「浮雲」の主人公であった苦しい知識人の余計者意識にも通じる。また作者自身が、表面は、ベスト・セラーズの作者として世に迎えられていながら、その内心では多くの苦悩を抱いていたこととともつながる。ただそういった暗い自我の在り方にたいして、十分な表現を与えることができなかった。これは、この作者の文学的自覚の問題でもある。また、当時の小説理念というものが、十分に確立されておらず、読物と小説の区別なども一般にはっきりしていなかったことに原因がある。……

（『文学』一九五六年八月号）

と言っております。

この芦花の文学理念、作家意識をさぐるためには、一九〇二年（明治三十五）九月、『国民新聞』に彼が発表した「何故に余は小説を書くや」という一文がよき手がかりとなっています。その中で芦花は、経済自立及び彼の自己確立の途上に立現われてくるさまざまの危機を切抜けるために小説を書いている――いいかえたならば文学の創造――と言っています。そして更に次のことばは注目すべきことだと思います。

何故に余は小説を書くや。他なし、人類の一員として毫厘たりとも四海一家の大理想に此世界を近づかしめ、日本国民の一員として進歩軍の別動隊として一頓座せる維新の風潮に鞭たんと欲するのみ。

ここには、明治時代において天下国家のことに責任をもとうとする士族意識と蘇峰の平民主義、或は又民族意識と人類意識と言ってもよいような二つのものが並存しているのでありますが、あくまでも文学者としての主体を国民的現実にかかわりあわせてゆこうとする態度があります。これは日本の近代化について深い憂慮を示した夏目漱石の態度（「現代日本の開化」明治四十四年）にも通じてゆくと思われます。とにかくこうした発想から芦花は、「無意識の瑣事に意義を見出し、拉雑の中に一貫せる命脈を認め、運命の足跡を繹ね、因果の起伏を探り、造化摂理の大法を発明」する仕事を作家の使命として強調しているわけでありますが、人間の運命、社会の進展を法則的に追求しようとする作家意識を、当時、自然主義文学の露払いとも目される小杉天外、永井荷風、田山花袋らの評論と比較するならばかなりの相違が見出されるのであります。

小杉天外は「はやり唄」の序で、小説は想界の自然であり、「読者をして、読者の官能が自然界の現象に感触するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得しむればそれで沢山なのだ」と言い（明治三十五年）、永井荷風は人類の一面にある動物性を指摘し、「余は専ら、祖先の遺伝と境遇に伴う暗黒なる幾多の欲情、腕力、暴行等の事実を憚りなく活写せんと欲す」と述べ（明治三十五年）、田山花袋は「露骨なる描写」を力説していたのであります。たしかに、自然科学的人間観を文学の世界にもちこみ、作品中の事件や人物の行動を、この見地からみた必然性において展開させることを教えた点で、ゾライズムは大きな役割をはたし、天外の「はやり唄」（明治三十四年）や荷風の「地獄の花」（明治三十五年）はゾライズムの実践を意図した作であったと思います。しかし、彼らのゾライズムは、作者自身が現実社会の矛盾とのたたかいの過程において人間観

念の変革を迫られ、その結果として到達把握したものでなかったこともたしかでありましょう。（榊原美文「近代日本文学の研究」）

ともあれ、私がここで指摘したいのは、自然主義的人間観に媒介された小杉天外らが描写論、技巧論にはしっていた時、芦花の中には健康なナショナリズムに支えられた文学論が生きていたということであります。さらに言うならば、彼の創作方法は、「小説家の第一義は視るにあり。行ひて視、帰り来って所見を報告す。単純なる報告可なり。自家の意見を附するも亦妨げず。要は視て見徹せりや、描いて描き徹せりや、唯是のみ」という単純なものでありますけれども、やがて自然主義作家たちが置き忘れていった社会変革的な要素を芦花はもっていたと思います。そしてこの自然主義作家の弱さは、やがて石川啄木によって批判されることになります。（時代閉塞の現状）

現在まで兄蘇峰と芦花との関係について、その対抗関係を強調する評論が多いわけでありますが、芦花の進歩的側面は多分に兄の平民主義からの影響を蒙っていると思われます。蘇峰が平民主義をかざして言論界に君臨したのは明治二十年前後でありました。明治二十年前後に流行した言葉の一つに、「天保の老人と明治の青年」というのがありました。明治も二十年たって政治革命も漸くその枠を完成しようとし、明治精神史の上に一つの大きな飛躍がなされようとしていたわけであります。そしてその文化推進の先頭に立ったのは多く青年でありました。「小説神髄」を刊行した時（明治十八年）に坪内逍遥は二十六才、二葉亭四迷が「浮雲」を発表した時（明治二十年）に二十三才、また蘇峰が「将来之日本」を出版したのが（明治十九年）、やはり二十三才でありました。ここでしばらく蘇峰の歴史観にふれてみたいと思います。

「将来之日本」は次のような言葉で問題を提起しています。

今日ノ変化ハ退歩ノ変化ニアラズ、進歩ノ変化ナリ。今日ノ戦場ハ最後ノ戦場ニ非ズシテ、初陣ノ戦場ナリ。今日ノ門出ハ絶望ノ門出ニアラズシテ、希望ノ門出ナリ……（中略）……故ニ之ヲ日本ノ変化ト曰ハンヨリ寧ロ日本ノ復活再生ト云フノ当レルニ如カズ。何トナレバ旧日本ハ既ニ死矣、今日ニ生存スル者ハ是レ新日本ナレバナリ。然レバ即チ日本ノ将来ハ如何。将来ノ日本ハ如何。

そしてその答として、これからの日本は、封建主義の腕力世界を去り平民主義による平和世界の樹立によって進むとしております。そうした新日本の自覚の上にたって、彼は歴史変革の主体を世代的には青年、階級的には平民であると規定しています。蘇峰は、歴史の変動を、有する階級ともたざる階級の衝突より起るとし、前者は保守的、後者は進歩的、そして歴史の進歩と変革は、つまり後者を代表する青年及び平民によって成就されると考えたのであります。これは階級闘争史観に世代史観を結びつけた形態でありますが、後年の社会主義或はプロレタリア文化運動の思潮につながってゆくものであることは言をまたないでありましょう。当時においてこのように歴史を洞察したということはすぐれたことであったと思います。蘇峰はたしかに歴史的必然のコースを明言していたと思います。然しながら、蘇峰は日清戦役、日本の国際的地位の向上や資本主義機構の発展をみて、その進歩主義を一擲し、絶対主義権力と妥協してゆきます。（明治三十年、松方内閣の勅任参事官。）芦花はスマートでないもたついた生き方をつづけながら、その平民主義の

残映を守りつづけたと言えましょう。与えられた近代日本の歴史の中で、「如何にして平和を将来せしむるか」、「如何にして必然にして自由な人間のあり方を獲得するか」というテーマに芦花は忠実であったのではないでしょうか。そうした課題に立向えば立向うほど、芦花の行動が奇怪になり、難解になって行ったのは当然であったと思われます。

四

最後に「黒潮」という芦花の作品にふれ、芦花の文学的自覚を解明する一助にいたしたいと思います。

小説「黒潮」第一部は明治三十五年一月から六月まで国民新聞に連載され、三十六年一月単行本として出版されました。更にその続篇を書こうとして果さなかったのであります。一つの主題にいつまでも執着をもっていたこと、そしてそれにもかかわらず、それが結局未完に終ったということは、芦花の生涯に於ても類のない特殊なことでありました。そして又、「黒潮」は「寄生木」と並んで、芦花の作家生活中、前期の客観的な社会小説と後期の告白小説の二つを展望しうる位置にもあるわけであります。

先ずそのあらすじから——。

「黒潮」には二つの筋があります。その一つは徳川幕府の遺臣東三郎を主人公とするものであります。三郎は幕末維新の戦に破れ甲州に隠棲しておりましたが、かつての同輩で今は台閣に列している桧山男爵の勧めもあって上京し、首相藤沢伯爵その他とも面会いたします。しかしながら、明治政府の浮薄な欧化主義運動や人民の膏血を絞って奢侈淫楽に耽っている高官の生活に反撥して激論し、その果、一層反政府熱をたかめて帰郷いたします。そして唯一の希望を一子晋につなぎ、日本を亡国の危機から救うべきことを遺言して死にます。もう一つの筋は大名華族喜多川伯夫人の悲劇が中心になっております。夫の放蕩、実弟の不行跡に苦しめられ、而も女大学式の婦徳を捨てることのできなかった夫人は苦悩の末自害してしまいます。かねて母を熱愛し、父の素行を批判していた十二才の令嬢道子は父の意志に反して尼になります。(笹淵友一の要約による。『文学』一九五六年八月号)

この小説の二人の主人公、東三郎と喜多川貞子はどちらもたしかに古い意識の持主として設定されております。東三郎は単なる倫理的批判で明治絶対主義官僚に対抗しております。「徳川政府はもう少し人民をおもっていた」とか、「今日の土台は幕末の偉人にある」とか百万遍くりかえしても、漸く自由民権運動の鎮圧に成功し、明治絶対主義機構の完成にいそぐ支配者に対抗出来ないことはたしかでありましょう。夫の不貞に悩む喜多川貞子は娘の道子に対して次のようにさとしております。

(1)「道子、何故女に生まれてお出だエ？　尼にお成り、尼にお成りなさい。他へ嫁って苦労して如何します？　男と云ふ者は皆不好者——道子、決して男の妻におなりでない。尼になるのです、尼に——」

(2)「死ぬまで黙って辛抱すれば、其で宜いのです。其が婦人の運命なのですから——」

こうした意識の二人がどちらも敗北してゆくのは必然でありましょう。然し、こうしたほろびゆく二人の言葉と行動を通して、芦花は明治支配体制の暗黒をてらしだしたのであります。明治支配体制

のもつ社会的不正とたたかう芦花の情熱は、次に二人の後継者東晋と喜多川道子の造型に苦しむことになったのであります。政治家として生きる晋、尼にまでなってしまった道子、その二人が明治支配体制の暗黒と重圧に抗してたたかう姿を描くことは最も本質的、根元的な明治社会批判の地点から問を出すということでありましょう。自由民権運動の挫折によって、わが国においては、ブルジョアジーの指導による、いわば古典的な型の民主主義革命がほとんど決定的に不可能にされた明治二十年代から三十年代にかけて、人間の生きる可能性とは一体どういうことであったでありましょうか。ここにおいて芦花は本質的に日本の近代に対して問を発することになったのですが、彼は遂に晋と道子の造型が出来なかったわけであります。さきほど述べましたような、「小説家の第一義は視るにあり。行いて視、帰り来って所見を報告す。単純なる報告可なり。自家の意見を附するも亦妨げず。要は視て見徹せりや、描いて描き徹せりや、唯是のみ」という小説理論ではこの仕事はどうにもならなかったのであります。いわばその当時、作家が自分の現実の秩序を否定して、その自己否定のエネルギーによって、夢想と現実、自由と必然の対立が統一されうるような、新しい可能性の場を確立することが非常に困難であったとも言えましょう。たしかに芦花の文学論は二葉亭四迷の「小説総論」などとの対比において、近代リアリズムの観点からも考えてみる必要があると思います。

五

昭和十四年三月、岩波文庫の一冊として芦花の「黒い眼と茶色の目」が刊行されました。その書物のあとがきで愛子夫人は次のように記しております。

此物語は著者が二十才の頃、京都同志社在学中、同校校長新島襄先生夫人の姪にあたる山本久栄嬢との間に発った恋愛の経緯を、私との結婚二十年後四十七才の晩秋、記憶を辿って書いたもので、此の事件が彼の生涯に如何ばかりの影響を齎らしたかは、彼自ら云ふやうに、彼を人生の裏小路に追ひ込んでしまった程の打撃であった。

彼は元来愛の人、快活が本質で、同志社で弁論部長に推されたほどであったが、一旦恋愛の絆に縛らるるや「恋愛は神聖」と意識する一方、「恋愛は男子の恥辱」と見做さんとする儒教の血も跳梁して、この新旧二元が彼の胸底で相争った結果、到頭彼は中途退学、京都出奔といふ敗北に身を委ねてしまった。

このあとがきでもわかるように、青春二十才の芦花は、すでにして「封建」と「近代」のはげしい相剋に身をやいております。プロテスタントの倫理の影響をうけた彼は、「恋愛は神聖」という近代意識と、「恋愛は男子の恥辱」という封建意識の相剋に悩んだのであります。歴史の必然として、封建秩序の崩壊とともに、近代作家たちは、自然について、神について、人間について、社会について、歴史について、或は又それらの相互関係について、新しい認識の体系を自ら確立しなければならぬ課題を背負わされました。徳富芦花も近代日本の作家としてその運命をまぬがれなかったのであります。そしてこのことは非常に烈しく困難な作業であり、芦花は幾度かの彷徨と動揺をくりかえさなければなりませんでした。「黒潮」中絶による兄蘇峰との訣別、「謀叛論」の講演、農村生活、外国への旅行などという一連の行動も、そうしたところに根をもっていた

ことを疑うことが出来ないと思います。

今日、日本の社会はようやく相対的な安定期を脱して危機を深めつつあると言われています。戦後の烈しい労働運動昂揚の後、それがひき潮になった時に、「太陽の季節」「楢山節考」「挽歌」というベストセラーが出現いたしました。これはたしかに社会的事件といえましょう。世界史的視野においても、原子力の出現、人工衛星の実験などで人類意識が目ざめ、新しい世界像の形成がうながされておりますが、現在の日本社会の皮相な拡大安定化を危機として認識するならば、過去とちがって、もっと複雑な形で私達の人間的欲求がなしくずし的に奪われつつあるという実感にいたるでありましょう。それ故、「太陽の季節」、「楢山節考」「挽歌」などの出現を、すぐれて社会的事件と言ったわけであります。こうした、いわば安定感の無軌道な拡大の時期をどのように文学者は把握してゆけばよいのか。今日における日本国民の全体的状況をどう把握し、どのように文学的表現として定着したらよいのか。これが現代文学に課せられた大きな問題であると思います。こうした時、明治、大正の社会の中で、何とかして国民の全体的状況を洞察し、人間の生きる可能性を見つけようとして格闘した近代作家徳富芦花の生涯を、顧みることは意味のあることだと思います。

（一九五七、一一、三〇）

キリスト教社会問題研究の一環としての、「丹波地方に於ける明治以後のキリスト教受容状況の実態調査」に対して、昨年アジア文化財団より研究助成金が交付され、目下岩井文男氏を中心に、第一段階として、㈠丹波地方におけるキリスト教の成立、発展状態の具体的調査、㈡該地方のキリスト教を受容した社会的構造及びその階層、㈢キリスト教の教育面におよぼした影響、について研究が進められている。さらに第二段階としては、地方産業とキリスト教の交渉経過及びキリスト教のその後の社会的変遷過程の調査が進められる筈である。